

文化・芸術

「花」

1982年、油彩・カンバス
24・0cm×19・0cm（大川美術館蔵）

三岸節子（1905～99年）

展示室1～3では「花」をテーマに、大川美術館のコレクションから洋画、日本画の作品をご紹介します。

「花」の作品を描き続けた三岸節子による本作は、ミモザを思わせる、豊かに広がる黄色の花が描かれています。緑色を背景に、目の覚めるような鮮やかな青色の花瓶から湧き上がるようにあふれる黄色い花。大胆な筆触で描かれながら、色彩は慎重に吟味され、絵の具が塗り重ねられています。

本作の画面では青と黄色の色彩の対比を試みていますが、それは同時に自然の中に咲く花の姿、青空に揺れる金色の花房をも思わせます。美しく繊細な自然の造形である花を憧憬（しょうけい）をもつて見つめた画家は、その目に映った情景を絵の具を何度も塗り重ね、生命力のある存在として画面に息づかせました。

6月の梅雨時の憂鬱（ゆううつ）を三岸は「体中から雫があふれるようである」と表現しましたが、そんな季節にも本作の花はまぶしい力強さをたたえているようです。

（大谷）



〈名画の扉〉

大川美術館コレクションから